
2人で1人の勇者様

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

【NZコード】

N7364Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は精霊魔術師、もう1人は大魔術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこと日常での、ほのぼのバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

結論（総論）

まずはじめに、いろんな小説を読んでいただき、ありがとうございます。

召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優だ。そして今、親友の紅葉穹は家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思つよ」

そう2人はいつも通り一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。

それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かつた。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言つてることが全く理解できないのですが

窓の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思ひますか……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

「ついに整った顔が印象的だつた。

と言つことは、オッサンはもしかしたら国王様なかもしれない。

「ソーリーが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思いますや

「こいつ時の君は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言つ国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか

?」

君はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな君の心情が分かるのは、生まれてから、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「つむ、それも話さなくてはならないな

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「「はー?」」

優と君は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だらう。

「勇者と言つのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのこの國だけだが、どの國でも勇者は最強の名を有する

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者つて称号持つてることですか？」

「そういう風に捉えてもらつてもよい」

「でも勇者が2人つてのはどうしてなんですか？勇者つて普通は1人だと思うのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかいないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言うのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとつてピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断つても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。
それに、2人とも勇者と言うのは満更でもない。
活潑的な優はともかく、それとは対照的な寧までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

「どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までには1人しかいなかつたが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手に取る。触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願ひします」

優の手を握つて挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ

優も窓もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互
いがモテる」とは理解している。

「えつ、フラグなんて立つてないだろ?」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別
珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の
地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はーい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、窓は事務的に返事をする。

召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、甯さん、早く起きて下をこ」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起こしに行かないし、王女が行つたりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと詮づことだ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ?」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「……おはよー」

甯が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「てい」

「いってえー、竈、何すんだよ？」

竈が布団をめくつて、太ももを思いつきり抓つたのだ。
それは尋常じやない痛さだつただろう。

「優が起きなかつたからね。ちょっとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

竈は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろ。

「あのお、食事が終わつたら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかいー」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフュルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を口にしちゃ」と。つてことでよろしいですか？」

「はい、それで間違ひありません」

竈が事務的に質問し、それに、フュルミも答える。

竈は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取つて

しまつのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ?」

「まだ説明してなかつたですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何もない場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀と言つわけでもないのと、今の時代まで生き残っているのだ。

「と言づわけです。何か質問はありますか?」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を擧げる。

「はい、ハウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしく。

「魔法と精霊術は分かつたが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いんです」

「」で窓ガ手を擧げる。

「あの、精霊つて……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずです。呼べるか呼べないかですしね。あつ、精霊王と上位の精霊は契約が必要らしいです」

「なら、僕は使えると思います、精霊術

「どうゆうの」とか説明して頂いても？」

さつきは両方使えるかもとは言つたが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言つてたら、信じたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんですね」

「内容を話してもうつても?」

穹は小さく頷く。

『小僧、力を求めるか?』

真っ白な空間にいる穹は、田の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からぬ。

『小僧、力を求めるか?』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめもらいますか?」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言つてきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうせ」

『小僧は、力を望んでここに来たのだろう?』

『貰えるものなら、貰つていきますよ』

『何のために力を望む?』

竜は少し考える。

『今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えても、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな』

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

『そういうことです』

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやります』

『けつこうですか』

予想外の答えに精靈王が固まる。

『では、力がいるのか?』

『それはいります』

『だから、精靈王の私が力になつてやるつと……』

「分かりました。で、僕は必ずいんすが?」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精靈王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精靈王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか?」

『私と契約したから、指輪になつて、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれる、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」

「と、まあ、そんなことがあつました」

「それって凄いことですよ? 精靈王の契約者なんて、100年以上出てきません」

「あつ、やつぱつ夢じじゃなかつたんですね」

「くそう、俺が精靈王狙つてたのに

優が本氣で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精靈で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で窓より凄いの使えるばいいのか」

「はいー。」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフュルニアは返事をする。

契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします

「では、魔術の基礎を教えます」

「はーい」「お願いします」

優は幼稚園児のような返事を返し、窓は丁寧に返事を返す。

「まず私は魔法しか使えないでの、精靈術のソラさんはイメージだけ掴んでください」

魔法にはいくつかの属性がある。

代表的なものが4大属性の火、水、風、土がある。
それとは別に光、闇、雷、氷、無属性がある。

それぞれの属性には、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法
がある。

例外として、無属性魔法にレベルはない。

そして、精靈術にもいくつか決まりが存在する。

精靈王を頂点として、火、水、風、土、光、闇、雷、氷の上位精靈
が存在する。

下位、中位の精靈は呼び出しても実体化しないが、上位精靈になる
と実体化する。

そして、上位精靈になると呼び出すのに、合意が必要になる。ゆえ
に悪人が上位精靈を呼び出して天災を起こそうとするることはできな
い。

それぞれの属性の精靈は、その属性しか使えないが、精靈王のみ例外として、それぞれの属性を中位精靈ぐらい使って、更に分解と再

生を使いつぶしができる。そこが精靈王と呼ばれる所以である。

「魔法と精靈術の説明は以上です。そしてまずは精靈術ですが、教科書通りに言わせていただくと、上位精靈を呼び出すには精靈の名前を、下位と中位の精靈を呼び出すには頭の中イメージするだけで大丈夫です。私は精靈術は使えないのですが、ここまでしか分かりませんが大丈夫ですか？」

「はい。方法さえ分かれば、後は僕が自分でやりますから」

「魔術学校に入れば専門的な部分も教えてもらえるので、続きは学校で教えてもらつてください」

「分かりました」

申し訳なさそうに言いつフホルミニ、竜は優しく笑顔で答える。

「まずは初級魔法から入るので、右手を前に出して掌の上に炎の球体をイメージして下さい」

「おおーすげー」

掌の上には炎の球ができていて、それを見て興奮している。

「ゴウさん、さすがは勇者ですね」

「……できない」

「えつ……」「

フェルミと優の声が重なる。そして声の主である竈の方を見る。

「なあ竈……できな『つ』……！』れがか？」

「うそ」

「それって……センスないんじゃね？」

「だよね」

竈がさつきよりも落ち込む。

「なあフェルミ、苦手な属性だから出来ないとかつてあるのか？」

「そりやたしかに上級魔法にもなれば得意属性しかできませんが、初級魔法は魔法が使える者なら誰でも使えますよ」

「じゃあ、俺は精霊術が、竈は魔法が使えないってことなのか？」

「普通の人はそうです。あと、事実としてソラちゃんに魔法が使えないのよ、おやらいはずだと思います」

「だってさ。竈は精霊術しか出来ないらしいぞ」

「魔法のセンスはないんだよね」

竈がどんどん落ち込んでいくので、すかすかフェルミがフォローに入る。

「精霊術はこの世界で最強になれる可能性があります。それで充分

じゃないですか

「世界最強……いいね」

穹がだんだん元気になつていいく。

「優、精靈術を極めて、精靈術で魔法に勝つよ」

「望むところだ」

「じゃあ、僕は離れたところで練習してくるよ」

「ああ」「あつ、はー」

穹が離れたところに行く。

「では続きですが、次は掌から水球を出してみてください」

その後も練習は続き、初級魔法は全属性一回田で使えるようになつた。

次からは中級魔法も練習しこ。

魔法の練習も終わり、王宮にある2人の寝室

「なあ穹、精靈つてどのへんまで出せた?」

「僕は下位の精靈なら全種類出せたと思つよ」

「初級魔法は全ていけたから、俺と同じか」

「じゃあ優には魔法のセンスがあるんだね」

「魔法使いはけっこうこうからな、その中でトップって並んでやつたら分かるんだ?」

「最上級魔法を全属性使えたら最強なんじゃない?」

「たしかにそりゃ最強だな」

「あつでも、最上級魔法って4大属性しかまだ確認されてないらしいよ?」

「じゃあ、他の4つも俺が作れば歴史上最強だな」

「だね」

「じゃあ、寝るか」

「わづだね」

その日から魔法の練習をして、優は全属性の上級魔法まで、今は4大属性の上位精霊まで呼び出せるようになった。

そして、魔術の練習ばかりしていたので、地理や歴史を全く勉強してないことに気づいたので、魔術学校入学の一週間から猛勉強することになった。

初級魔法（後書き）

ただひたすらに魔術学校の話が書きたくて、超展開にしてしまったことを、今この場を借りてお詫びします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄まで願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

2人で1人の勇者様

2011年11月23日17時52分発行